

謎解きラスタ－彩陶 コードネームは「甘美ナ声ノ挽歌誦ミ」

図版2 ゴムのファーティマ廟内部に設置されたラスタ－彩陶製棺（13世紀初頭、カーシャーン製）と参詣者たち。この棺は、現在は廟附属のアスターネ・モガッデセ美術館に移管されている。写真提供：Behzad Yousefzadeh氏。

神田 惟 かんだ ゆい / 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員 (DC1)

ラスタ－彩陶は15世紀以降、イランのどこで作られていたのか。この問いは、とある16世紀半ば製のラスタ－彩陶製墓の碑文の解読によって決着を見た。思いもよらぬ暗号が、碑文中のペルシア語詩に隠されていたのだ。

図版1 「サアド」銘入りラスタ－彩陶器片（11世紀、エジプト・フスタート製）。Fouquetコレクション旧蔵フスタート採取陶片コレクション、公益財団法人大原美術館（倉敷）蔵、所蔵番号V.C.65。筆者撮影。



ラスタ－彩陶とイラン

「赤金のように輝き、太陽の光のように照る」—1300/01年、イル・ハーン朝第8代君主オルジェイトウ（在位1304-16年）に仕えた歴史家アブー・アル＝カースィム・カーシャーンは、自著『鉢物の花嫁と香水の秘宝』の中で、焼成に成功したラスタ－彩陶をこのように形容している。この表現が、強ち誇張ではないことは、実際に肉眼でラスタ－彩陶を観察するとよく解る（**図版1**）。ラスタ－彩陶とは、胎土の上に釉薬を施し一度焼成したのち、銀や銅などの酸化金属を含む顔料で絵付けし、さらに還元焼成した上で、表面を磨いて煤を取り除くことによって、輝き（英語で「ラスタ－」）を得たタイプの陶である。

ラスタ－彩技法がエジプトからイランに伝わったのは12世紀末のことだ。13世紀になると、この技法は、宗教施設などの大規模な建築物を彩るタイルを装飾する技法として広く用いられるようになった（**図版2**）。やがて14世紀半ばになると、

ラスタ－彩タイルの用途は多様化し、個人の死を記録する墓碑にも適用されるようになったが、その品質・生産量には次第に陰りが見えるようになった。その後、15、16世紀の低迷期を経て、17世紀後半に再び、ラスタ－彩技法は容器に好んで適用されるようになり、再興を遂げた。

12世紀末から14世紀半ばまでの間、イランでは、中北部に位置する都市カーシャーンのみでラスタ－彩陶が製作されていた。このことは、陶に施された銘文の内容（「カーシャーン出身の」あるいは「カーシャーン在住の」陶工によって製作されたという内容など）のほか、カーシャーンの名門陶工一族の出身であった前述のアブー・アル＝カースィムが、ラスタ－彩陶の材料や製作方法について小論を残していることから、ほぼ確実であり、現在、多くの研究者たちの合意するところだ。

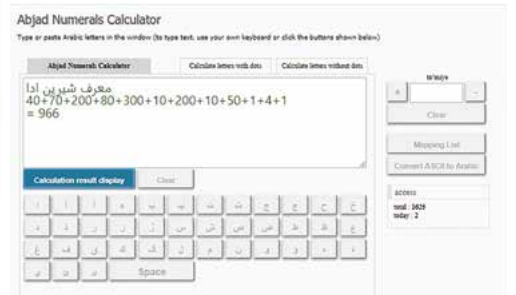
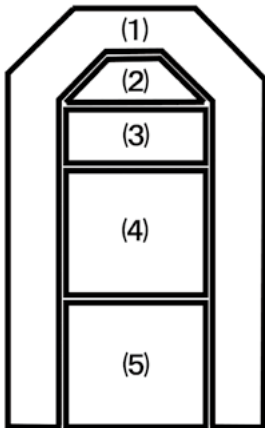
他方、15世紀以降のラスタ－彩陶の製作地については、未だ明らかになっていない。当該時期のラスタ－彩陶に関して言えば、銘文中に製作地や陶工の出自を示す情報はなく、製作地同定に結び付くような記述を有する一次史料は知られておらず、さらには、窯址や焼き損じ品の出土が一切確認されていないためである。

読み解かれなかった詩

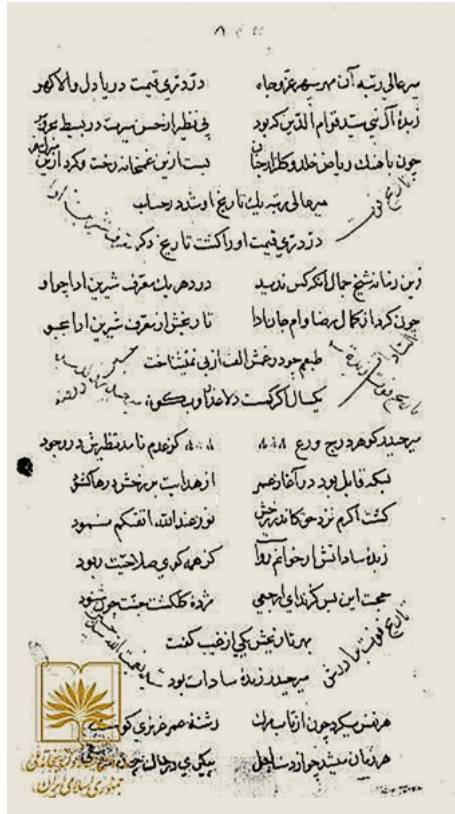
筆者は、とある16世紀半ば製のラスタ－彩陶製墓の碑文を読み解くことで、手掛かりのない15世紀以降のラスタ－彩陶の製作地について、新たな知見を得た。考察の対象としたのは、ハンブルク美術工芸博物館所蔵のラスタ－彩陶製墓（所蔵番号1960.64）（**図版3**）の碑文である。この碑文は、内容・言語・字体によって、5つのパートに分けることができ（**図版3左**）、(4)の部分から、



図版3 ラスタ－彩陶製墓（ヒジュラ暦967年ジュマダー第二月25日〔1560年3月23日〕）、ハンブルク美術工芸博物館（ハンブルク）所蔵、所蔵番号1960.64。©Museum für Kunst und Gewerbe in Hamburg。左は碑文構成図。



図版4 『アラビア文字紀年銘（クロノグラム）年代計算プログラム』のウェブページ。「MIR SHYRYN ADA」の12文字の計算結果を示している。同プログラムについて詳しくは、本誌13号23ページの記事をご参照下さい。



図版5 『ムフタシャム・カーシャーン七詩集』、増補のちヒジュラ暦1088年(1677/78年)完成、イラン国立図書館、所蔵番号458。第6~9行が図版3左の(5)に相当。

このラスタール彩陶製墓は、「ヒジュラ暦967年ジューマダー第二月25日(1560年3月23日)」に歿した「シャイフ・ジャマール・アッ=ディーン・マスウード・アル=ムアッリフ・アル=シーラーズィー(以下、マスウード)」という人物の死を記録しているものとわかる。本稿でとりわけ着目するのは、(5)の部分にアラビア文字のナスタールーク書体で書かれた以下のペルシア語詩だ。

「時代の飾り、麗しの尊翁／
此の世で彼ほどの『甘美ナ声ノ挽歌誦ミ』
に逢うた者は無し／
彼が此の世を去り天国へ向かったとき／
その日付(クロノグラム)を『甘美ナ声ノ挽歌誦ミ』に求めよ／
悲しみにくれ、我が詩的才能は、アリフとバーの区別もつかぬ／
もし、一年が…(以下、ひび割れのため判読不能)」

アリフとバーは、アラビア文字の最初と2番目の文字である。先行研究においてこの詩は、「ペルシア語で書かれた宗教的な詩」として言及されたのみで、同定はおろか、解釈や訳出すら一切試みられたことがなかった。

第一の謎：誰のために、何のために作られた詩か

このペルシア語詩は誰のために、何のために作られたものか。

その答えは、詩の中に二度登場する語句、「甘美ナ声ノ挽歌誦ミ」の中に隠されている。詩の4行目にあるように、この語句はクロノグラム、すなわち各文字に当てられた数字を合計して年代を表す句となっている。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センターのウェブサイト『アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラム』(http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/J/?page_id=23)を用いて、「甘美ナ声ノ挽歌誦ミ」の原文、*mu'arrif-i shirin-adā*(ラテン文字転写で“M'RF SHYRYN ADA”)の12文字を計算してみよう。合計は、 $40+70+200+80+300+10+200+10+50+1+4+1=966$ となるはずだ(図版4)。この966という数は、被葬者マスウードの歿年である967年と僅かに1年しか違わない。

では、残りの1年はどこに行ってしまったのか。答えは、この詩の最後2行にある。詩の作者は5行目の「アリフとバーの区別もつかぬ」という一文は、*mu'arrif-i shirin-adā*(“M'RF SHYRYN ADA”)の最後のアリフ(“A”、1に相当)をバー(“B”、2に相当)に読み替えるよう、暗に促している。そのヒントに従って計算し直すと、クロノグラムの合計は $40+70+200+80+300+10+200+10+50+1+4+2=967$ 、すなわち、被葬者の歿年となる。つまり、このペルシア語詩は、被葬者マスウードの歿年を記録するため、レトリックの妙を極めた人物によって特別に編まれたクロノグラム入りの詩なのである。

第二の謎：詩の作り手は誰か

残念ながら、被葬者マスウードの素性については、現時点で、謎に包まれたままだ。となると、この墓の秘密を暴くには、追悼詩の作り手が誰であるのかを追及することが正攻法となろう。

筆者は、追悼詩の作り手が、サファヴィー朝期

(1501-1722年)イラン最大の詩人、ムフタシャム・カーシャーン(1588年歿)であることを突き止めた。墓に記されたペルシア語詩は、ムフタシャムの遺言に基づき彼の直弟子が編纂した詩集(『七詩集』)の第6章「特別な機会のために」に収められている。クロノグラム入りの詩のみを扱うこの章には、ムフタシャムの身近な人々の誕生や昇進のほか、建物の竣工を記録するために編まれた詩などが収録されている。

興味深いことに、イラン国立図書館所蔵の現存最古の『七詩集』写本(所蔵番号458)の「甘美ナ声ノ挽歌誦ミ」の項目を見ると、訳詩3行目に当る部分だけ若干内容が異なっている(図版5)。写本に記録されていながら、墓碑として採用されていないこのバージョンは、ムフタシャム本人がボツにしたものなのだろうか。あるいは、弟子が師の言葉の運び方に不満を持ち、勝手に書き直したのだろうか。この問題は、未だ解決を見ない。

最後の謎：墓はどこで作られたのか

これまでの調べで、マスウードの墓には、製作者サイドの人間として、クロノグラムの達人ムフタシャム・カーシャーンが関与していることが明らかになった。裏を返せば、ムフタシャムの活動範囲内で、マスウードの墓—すなわち、ラスタール彩陶製墓—が作られたと推定することに無理はない。

ムフタシャムは実に、生涯をカーシャーンで過ごした詩人として知られる。このことは、ムフタシャムの存命中および歿後50年以内にイラン、中央アジア、そしてインドで編纂された詩人伝(詞華集)や年代記の記述から明らかである。多くの詩人や画家が、より良いパトロンを求めてイランからインドへと渡った時代に生きたにも拘らず、彼はイランに、それも、生まれ故郷カーシャーンに留まり、詩作を続けた。

つまり、マスウードの墓の碑文中のペルシア語詩は、16世紀半ばに至るまで、ラスタール彩技法がカーシャーンにおいて保持され続けていたことを示唆しているのだ。今後研究者たちは、写本以外のメディアに残されたペルシア語詩について、精査していかなくてはならないだろう。その際に、本稿で利用した『アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラム』が大いに役立つであろうことは、言うまでもない。